



写真1 遣米平和使節団／「スライディング・ドア」



写真2 遣米平和使節団として渡米した河井道
／河井道 Photo Gallery



2023.11.2 創立94周年記念式典

恵泉

題字・河井道

2023年度 第4号

2024年1月9日発行

「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」(マタイによる福音書第五章九節)

九四周年の創立記念式典に、神に感謝を献げ、創立者河井道を想い、その労苦と建学の精神を大切に受け止めます。志を共にする全ての方々に感謝を申し上げます。毎年の創立記念式典ですが、その年に固有の出来事があります。今年外からは、私たちの平和への願いや取り組みとは裏腹な、戦争をエスカレートさせる世界の動きがあります。そして内からは、三月、理事会は大学の募集停止を決めました。誰も望まない、しかし現実を担わなければならないという苦難の中を、恵泉女学園は歩んでいます。

今の時代は、大人が大切な理想を捨てている時代であると受け止めています。平和の理想を言う時ではない。世界が戦争に進んでいるのだから、我々も軍備を増強して対応するしかないのではないかと、言っています。誰もが平和を求めていると、当たり前のように言っていた世界は、どこへ行ってしまったのかと思います。世界が理想を捨てていく今、理想を掲げて生きるのが、私たちです。

恵泉女学園は創立当初から、決して平坦な歩みでも順風満帆の歩みでもありませんでした。むしろ、逆風に逆らい、強い意

志をもった創立者河井道の、信念と信仰を携えての挑戦でした。私たちはその理想を、どんな逆風の中でも掲げ続けて生きる者でありたい、と願っています。

創立の一九二九年は、ちょうど今のような時代でした。それは世界恐慌の年であり、資本主義が行き詰まり、世界が戦争に向かう方向を定めた頃でした。平和の理想では駄目だ、戦争以外の道は無いと、皆が思った正にその時に、河井道は平和を掲げる恵泉女学園が存在しなければならぬと、心を燃やしたのです。私たちは今、同じ状況を

「ピースメーカーとして生きる」
(創立九四周年記念式典式辞)

学園長 廣瀬 薫

見えています。だから私たちは理想を手放さずに生きたい。全ての人が活かされて共に喜んでいく平和な世界(神の国)を目指し続けることが大切な時代です。今の時代は、恵泉女学園が掲げる光がなければならぬ時です。授業で、もしも戦争になったら、私は、若い人にどう生きて欲しいか、かか話を話しました。色々な考え方はあるけれども、私は、三つの局面、戦争の前と、戦争の最中と、戦争が終わった後、こう生きて欲しいと思っています。

まず戦争の前は、戦争になら

ないように全力を尽くす。戦争は全て、やる必要の無い戦争ばかりです。今年は講演の機会がある度に、随分この写真を見せました。【写真1】一九四一年、日本とアメリカが戦争に入る直前、日本のキリスト教会がアメリカに送った最後の平和の試み、遣米平和使節団です。九名のメンバーの中で唯一の女性が、河井道です。

既に敵対状態にあるアメリカに河井先生が行くと、大歓迎です。【写真2】アメリカの大学からの名誉学位も受けました。日本に帰ると、警察当局の取り調

べを受けます。あなたは敵の国へ行つて、平和などという、日本の路線とは違う、いけないことをしたのではないかと圧迫されます。今の時代も、相手の国へ行つて、手をつなぎ、平和への道を造ろうとしている人たちの存在が大切です。

次に戦争の最中は、終始、戦時国際法上の「民間人」であって欲しいのです。戦争には参加しない。戦争はプロに任せる。私たちは、けが人や難民を助けるだけ。民間人が戦争に参加すると、兵士ではなく犯罪者として扱われるリスクがあります。

むしろ戦争が終わった後、再び愚かな戦争を起こさないように、平和な世界を造る難しい課題に励むために、今はしっかりと勉強してください、と私は願っています。

聖書は私たちに、「平和を実現する人々」であれ、と教えます。平和を守る人々(ピースキーパー)ではなく、ピースメーカーです。今ある平和を守るだけでなく、今平和が壊れている所に新しく平和を造る人々であれ、というのは非常に高い理想です。行動的で積極的な平和への姿勢を求めています。

「神の子と呼ばれる」とは、神と同じ性質を持つ尊い存在という意味です。神のように私たちも、愛と光と平和を掲げて生き、理想を諦めずに「ピースメーカーとして生きる」者として存在しましょう。それはどんな生き方なのでしょうか。最後に、広く知られた「平和を求め祈り」(アッシジのフランシスコの祈り)の一部を、私たちの祈りと受け止めて終わります。

「神よ、私をあなたの平和の道具としてお使いください。憎しみのあるところに愛を、いさかいのあるところに赦しを、分裂のあるところに一致を、疑惑のあるところに信仰を、誤っているところに真理を、絶望のあるところに希望を、闇に光を、悲しみのあるところに喜びをもたらず者としてください。…」